

## 南部エジプト大反乱と東地中海世界

周 藤 芳 幸

### はじめに

プトレマイオス朝エジプトは、前三世紀の後半までエーゲ海各地の拠点を足がかりにギリシア世界の国際政治に積極的に介入し、ナイル流域からの富の蓄積を背景として「海上帝国」を謳歌していた<sup>1</sup>。しかし、その後は、前三世紀の末に向かって次第に衰退の色を濃くしていったと述べられるのが一般的である<sup>2</sup>。なかでも、しばしばプトレマイオス朝の衰退を象徴する事件とみなされてきたのが、いわゆる南部エジプト大反乱である。プトレマイオス朝の支配下においては、プトレマイオス三世の即位直後の前二四六年にもエジプト人の反乱が起きていたが、これは時を経ずして終熄したらしい<sup>3</sup>。しかし、前二〇六年に始まった南部大反乱に際しては、アレクサンドリアの王権に反旗を翻した<sup>テューバ</sup>管区を中心とする上エジプトの在地住民の一部は、独自のエジプト人ファラオを推戴することで半ばプトレマイオス朝の支配からの独立を達成するにまで至っていた。この反乱は前一八六年になってようやく鎮圧されたが、約二〇年にわたって上エジプト（さらには下エジプトの一部）を混乱に陥らせたこの反乱が、プトレマイオス朝による領域部の支配に深い爪痕を残したであろうことは想像に難くない。

その一方で、この南部大反乱のさなかにおいても、プトレマイオス朝はコイレ・シリアの領有権をめぐるセレウコス朝との間で第五次シリア戦争を遂行するなど、依然として積極的な対外政策を展開するだけでなく、内政面では、メンフィス決議を通じてエジプト人神官団との結束の強化をはかるなど、様々な困難への対抗措置を怠っていない。また、別の機会に論じたように、エジプト人の在地エリートの中には、反乱のさなかにあって、積極的に王権側に対する支持をアピールする者もいた<sup>4</sup>。何よりも、最終的には王権の側がこの困難を克服し、その後もプトレマイオス朝が一世紀半ほども命脈を保ち続けることができたという事実は、この事件を単純にエジプトの「衰退」という文脈でのみ理解することに警告を発している<sup>5</sup>。

そこで、本論文では、これまで専らエジプト国内における「支配層であるギリシア系の王権」と「被支配層であるエジプト在地住民」とのエスニックな対立の産物として、すなわち本

1 海上帝国としてのプトレマイオス朝については、Buraselis et al. (2013) 所収の諸論考を参照。

2 Austin (2006) 478-479.

3 この反乱については、Veisse (2004) 3-5を参照。

4 Suto (2003).

5 Shipley (2000) 203-205.

質的にはエジプト内部で完結する事件とみなされてきたテーベ管区の反乱について、その経緯を同時代の地中海世界というコンテキストに位置づけ直すことにより、新たな解釈を提示してみたい。

## 1. 南部大反乱への歴史的な評価

ヘレニズム時代の歴史を考察する上でもっとも基本となる史料は、言うまでもなくメガロポリス出身の歴史家ポリュビオスによる『歴史』全四〇巻であり、その叙述内容は、常に前三世紀から前二世紀の地中海世界の歴史を再構成する際の参照軸とされてきた。しかし、このことは、ヘレニズム史に対する理解の枠組みが、様々な点においてポリュビオスの歴史認識に拘束されていることをも意味している。実は、プトレマイオス朝の最初の三代の王のもとの「隆盛」とプトレマイオス四世以降の時代の「衰退」という広く受け入れられている二分法も、もとを辿るならば、ポリュビオスの次のような叙述に由来している。

「フィロパトルと呼ばれるプトレマイオス（四世）は、父王の死後、弟のマガスとその一味を殺害して、エジプトの支配権を掌握した。こうして自らの努力で政敵を一掃することによって国内の脅威を取り除いた彼は、国外の危険からも運命のめぐり合わせにより解放されることになった。というのも、このときアンティゴノス（ドソン）とセレウコス（三世）が相次いで世を去り、その跡を継いで王となったアンティオコス（三世）とフィリポス（五世）は、まだ子どもと言ってよいほど若かったからである。このような情勢を見てすっかり安堵してしまったプトレマイオスは、即位直後からまるで毎日がお祭り騒ぎのような統治ぶりを見せ始めた。彼は宮廷内の人やエジプトの内政にあたる人に対しては気難しく近づきたい印象を与える一方で、国外での活動に関わる人に対しては不熱心で無気力だった。しかし、この国外での活動こそは、歴代の諸王がエジプトそのものの統治に優るとも劣らぬほどの熱意をもって遂行してきた領域なのである……。このようにはるか遠くにまで手を伸ばし、はるか先の方にまで自身の勢威を拡大していたからこそ、エジプト自体の支配に何の不安も持たずにいられたのだ。それゆえ、過去のエジプト王が国外での活動に多大な努力を傾けてきたのも当然だった。ところが、このプトレマイオスは、恥ずべき色恋と節度のない飲酒に明け暮れ、そういった活動にはまったく関心を払わなかったので、当然のことながら、王の周辺には、王の生命と権力を狙って陰謀を企む者が時をおかずに見え、しかもその数は一人だけではなかった」<sup>6</sup>。

<sup>6</sup> Polyb. 5.34. 以下、ポリュビオスの訳については、西洋古典叢書に収められた城江良和訳『歴史』に準拠しつつ、部分的に改変している。

また、ポリュビオスは、彼がプトレマイオス朝の王権と在地エジプト人との関係を大きく変えることになった事件とみなす前二一七年のラフィアの戦いの後の時代のエジプト情勢について言及する中で、在地民の反乱について次のように述べている。

「プトレマイオス（四世）のところでは、（ラフィアの）戦いの直後に、エジプト人との戦争が勃発した。この王はアンティオコスとの戦争に備えてエジプト人に武器を供与していたが、これはその限りにおいては首肯できる方法であっても、将来のためには誤算だった。というのも、ラフィアでの勝利に意気盛んとなったエジプト人は、もはや命令に甘んじることなく、彼らを指導することのできる人物を自分たちで見出そうとしたからである。それは、間もなく実現されることになった」<sup>7</sup>。

残念ながら、エジプトの南部大反乱そのものに関するポリュビオスの記述については、抜粋しか伝わっていないが、そこにはこのような記述が見られる。

「プトレマイオス・フィロパトルは、コイレ・シリアをめぐる戦争（第四次シリア戦争）の終結後、正道からすっかり外れて、いま書き記したような自堕落な生活に足を踏み入れてしまった。そして晩年になってから、状況に抗しえず先述の（エジプト人との）戦争に引き込まれたが、この戦争は、双方が犯した残忍と非道の行いを別とすれば、陣列を対した合戦もなければ海戦も都市攻城戦もなく、およそ記録に値するいかなる事件もない戦争だった」<sup>8</sup>。

これらの叙述に見られるポリュビオスの見解をまとめれば、この時期のエジプトの「衰退」の最大の原因はプトレマイオス四世の性格の問題であって、ラフィアの戦いでエジプト人に軍事的な自信を持たせたことが南部大反乱を招いたが、この反乱そのものについては特段に詳述する価値はない、ということになろう。ここで注目されるのは、この最後の判断である。というのも、周知のように、ポリュビオスの『歴史』は、どのようにして前二二〇年（ポリュビオスによれば、それまでばらばらに進行していた地中海の歴史が一つのまとまりを持つようになった起点）から前一六八年（第三次マケドニア戦争によるアンティゴノス朝マケドニア王国の滅亡）までの短い期間にローマが東地中海世界を征服することができたのかを説き明かすことを目的に書かれたものである。その彼が、南部大反乱への対応について「記録に値するいかなる事件もない戦争」と評している事実は、明らかに彼がこの事件をローマによる東地中海征服とは直接関係のないものであって、単に放埒なプトレマイオス四世の晩年を苦しめることになった内政上の出来事の一つとしてしか考えていなかったことを暗示している。

7 Polyb. 5.107.

8 Polyb. 14.12.

もちろん、現代の研究者は、このようなポリュビオスの歴史観を無批判に受容しているわけではない。たとえば、近著でローマの東方進出をめぐる国際関係について論じたエクシュタインは、前二〇七年以降のプトレマイオス朝の「崩壊」がもたらした東地中海情勢の変化こそ前二〇〇年にローマがギリシア世界への介入を決断する決定的な契機だったと主張し、当時のプトレマイオス朝が直面していた危機として、この南部大反乱、宮廷内の混乱、そしてプトレマイオス四世の死という三つの要素を列挙している<sup>9</sup>。しかし、このエクシュタインの議論に典型的に見られるように、多くのギリシア史の研究者にとって、エジプトの南部大反乱とはプトレマイオス朝の弱体化に寄与した深刻ではあるがローカルな事件に過ぎない。この時期に対する関心の的となってきたのは、あくまでローマの東地中海への進出と、それに対する東地中海の諸勢力の複雑な対応である。

その一方で、エジプト史（プトレマイオス朝史）の研究者は、パピルスやグラフィティなどの同時代史料から出発しつつも、やはりポリュビオスの提示する枠組に依拠することで、南部大反乱をあくまでエジプト内部に限定された問題として、すなわち、少数のギリシア系の支配層が多数の在地エジプト人を支配していたことに起因する社会的な、もしくは民族的な緊張関係の産物として位置づけてきている<sup>10</sup>。しかし、前二〇〇年というヘレニズム史の転換点を挟んで続いたこれほどの大事件が、同時代の地中海世界の国際政治と無関係に進行するということがあり得たのであろうか。また、仮にそうであったとしたら、その理由は何だったのか。この問題を考察するために、次節ではまず同時代の地中海世界の国際関係の変遷に目を向けてみたい。

## 2. 南部大反乱時代の地中海世界

上エジプトの在地エジプト人がプトレマイオス朝に抗し続けた二〇年間は、地中海の歴史の中でも特に大きな事件が引き続いて起こった時代だった。この頃、セレウコス朝では、プトレマイオス四世の同世代にあたるアンティオコス三世が、開祖であるセレウコス一世勝利王<sup>ニカトル</sup>の広大な版図を回復するべく精力的な軍事活動を展開していた。とりわけ、前二一二年から前二〇五年にかけてアンティオコス三世がバクトリアとインドに向けて遂行した大規模な東方遠征は、彼にアレクサンドロス大王に比肩する「大王」<sup>メガス</sup>という尊称を名乗る根拠を与えることになった<sup>11</sup>。

アンティオコス三世がアレクサンドロス大王の再来をめざしていたとすれば、やはりプトレ

<sup>9</sup> Eckstein (2008) 6-7, 124-168.

<sup>10</sup> Hölbl (2001) 153; Veisse (2004).

<sup>11</sup> この「大王」という尊称の導入は、東方領の支配に正統性を与えるための王朝祭祀の創設と関係するものと推測されている。Ma (1999) 64.

マイオス四世の同世代にあたるアンティゴノス朝マケドニアの王フィリポス五世は、アレクサンドロス大王の父フィリポス二世の姿を追っていた。彼は、ギリシアの覇権を握るべくアイトリア連邦やアカイア連邦などのギリシア諸勢力と抗争を繰り返した結果、それらを支援する西方のローマと対立するようになった。彼がカルタゴのハンニバルと結んでローマと戦った第一次マケドニア戦争は、前二〇五年のフォイニケの和によって一応の終結を見たが、その後、一転してエーゲ海に侵略の矛先を向けた彼の勢いに脅威を感じたロドスやペルガモンがローマの元老院に訴え出たことにより、前二〇〇年には再びマケドニアとローマとの戦争（第二次マケドニア戦争）が始まる。この戦争は、前一九七年の初夏にテッサリアのキュノスケファライで行われた会戦において、フィリポス五世がローマ軍に敗れることによって決着した。このときフィリポス五世は、外交関係の文書がローマの手に渡らないよう、それらをラリサで部下に焼却させている<sup>12</sup>。

一方、第一次マケドニア戦争と第二次マケドニア戦争との間には、ローマ側の情勢に大きな変化が生じていた。前二〇二年の春、ザマの戦いで、ハンニバルの率いるカルタゴ軍がスキピオの率いるローマ軍に敗北を喫したのである。こうして、カルタゴという大きな障壁が取り除かれたことが、ローマに東方情勢への介入を積極的に促すことになったことは、衆目の一致するところである。なお、ハンニバルはザマの戦いの後もなおカルタゴの政界にとどまっていたが、前一九五年にはアンティオコス三世のもとに亡命した。そのアンティオコス三世は、第二次マケドニア戦争でアンティゴノス朝がローマの膝下に屈すると、トラキアの領有権などをめぐってローマとの対決姿勢を鮮明にしたが、前一九一年にはギリシアのテルモピュレで、また前一九九年には小アジアのマグネシアでローマ軍に敗れ、前一八八年のアパメイアの和で地中海世界における権益を大幅に喪失することになる。

このような一連の動向の中で、古典史料に伝えられるプトレマイオス朝の果たした役割は、奇妙なほど影が薄く主体性を欠いている。この時期のプトレマイオス朝の受動的な位置づけを示すもっとも象徴的なエピソードが、前二〇三／二年にアンティオコス三世とフィリポス五世の間で、プトレマイオス朝の領土を分割する協定が結ばれたという逸話である<sup>13</sup>。ポリュビオスは、『歴史』第三巻において自らの叙述の構想を示しながら、次のように述べている。

「(シュラクサイのヒエロンの支配の崩壊)の後に続くのは、エジプト国内の混乱であり、プトレマイオス王(四世)の死後、後に残された息子の治める王国を分割しようと、アンティオコス(三世)とフィリポス(五世)が共謀して悪辣な行為に走り、フィリポスはエーゲ海域とカリヤとサモス島、アンティオコスはコイレ・シリアとフェニキアに手を伸ばすに

<sup>12</sup> Polyb. 18.33.2.

<sup>13</sup> Hölbl (2001) 135.

いたった」<sup>14</sup>。

この協定の史実性については研究者のあいだで議論があるが<sup>15</sup>、実際にそのような協定が交わされたか否かにかかわらず、少なくともポリュビオスが当時のプトレマイオス朝を国内の混乱に疲弊し強国の侵略を甘んじて受けるだけの存在として理解していたことを示唆している。そして、この時代に関する現代の研究が、このポリュビオスの理解に大きく拘束されていることは言うまでもない。

それでは、当時のエジプトの混乱、具体的には南部大反乱とは、いったいどのような事件だったのであろうか。そこで次に、主としてペストマン、クラリュス、ヴェイスらによる研究に依拠しつつ<sup>16</sup>、この争乱<sup>クラケー</sup>の概要を再構成してみよう。

### 3. 南部大反乱の経緯

南部大反乱の勃発に言及するもっとも古い史料は、エドフのホルス神殿の外壁に刻まれた、神殿の建築過程に関する年代記碑文である。そこには、このように述べられている。

「……神殿の内壁が、王（プトレマイオス四世）の名や神々の姿を表現する素晴らしいレリーフなどで飾られた。その主門と部屋の二重の扉は、治世一六年（前二〇七／六年）までに完成された。このとき、争乱が生じた。上エジプトで起きた反乱のために、エドフの神々の玉座（ホルス神殿）の建築工事は中断された。この反乱が鎮圧されたのは、上エジプトと下エジプトを統べる愛父神（プトレマイオス四世）夫妻の後継者でラー神の子でありブタハ神に愛された力強いプトレマイオス（五世）、彼は没後に顕現神となったのであるが、その治世一九年（前一八七／六年）のことで、この王の名も神殿に刻まれた……」<sup>17</sup>。

まもなく反乱軍はテーベに侵入し、前二〇五年十月から十一月には、指揮官のハロンノフリスをファラオに推戴した。アビュドスのオシレイオンでは、ギリシア語アルファベットで「治世五年、ファラオ、ヒュルゴナフォル」と刻んだグラフィットが発見されており<sup>18</sup>、このヒュルゴナフォルがハロンノフリスを指していると考えられることから、前二〇一／〇年までには反乱軍がアビュドスまで北上していたと推測されている。なお、このアビュドスから僅かに三

<sup>14</sup> Polyb. 3.2.8, cf. Polyb. 15.20.1-2.

<sup>15</sup> 関連史料と研究史については、Eckstein (2008) 121-180に詳しい。

<sup>16</sup> Pestman (1995); Clarysse (2004); Veisse (2004); Hölbl (2001) 153-159.

<sup>17</sup> Kurth (2004) 49-50.

<sup>18</sup> Pestman (1977) no. 11. このグラフィットは、エジプト語のテキストをギリシア語のアルファベットを用いて表記した珍しい例として知られている。

五キロを隔てた地点には、プトレマイオス朝の上エジプトにおける重要な統治拠点プトレマイスがあるが、そこでは前二〇六／五年から前二〇〇／一九九年まで王朝祭祀の神官の名が知られていない<sup>19</sup>。この事実もまた、この地域が反乱軍によって占拠されていたことを暗示している<sup>20</sup>。一方、反乱軍の支配圏がテーベからパテュリスを越えてどの程度南にまで達していたのかは不明である。

このような状況下で、前二〇〇年頃になると、プトレマイオス朝の側も反撃に出た。先に反乱軍のグラフィットが刻まれていたアビュドスのオシレイオンには、トロイゼン人ヒエロクレスの子フィロクレスによる治世六年パウニ月のギリシア語奉納碑文も残されているが、この治世年はプトレマイオス五世のもの（前一九九年）であろうと考えられている<sup>21</sup>。プトレマイスにおいても、前一九九年には、ディカイアルコスの子クレイトマコスが王朝祭祀の神官に任命されている<sup>22</sup>。

ちょうど同じ頃、反乱軍の側にも変化が生じた。前一九九年の夏から秋にかけて、ハロンノフリスに代わって（息子の？）カオンノフリスが王位についたのである。カオンノフリスは、その治世年をハロンノフリスのそれから通算して数えているが、このことは、両者の名の類似とともに、反乱軍内部の権力継承が順調に進んだことを示唆している。ただし、事情は不明ながら、即位して間もなく、カオンノフリスはテーベを失うことになったらしい。というのも、前一九八年から翌年にかけてのテーベに由来する文書には、再びプトレマイオス五世の治世年が採用されており、前一九七年四月にテーベで亡くなった聖牛アピスも、無事にメンフィスまで搬送されているからである<sup>23</sup>。その一方で、おそらくカオンノフリスは北のリュコポリス州（後述するデルタのリュコポリスではなく、上エジプトの現在のアシュート付近）に進出することでアレクサンドリアとテーベとの分断を図り、さらに前一九〇年代の後半になると、再びテーベを占拠した。

これに対して、プトレマイオス朝側は、前一九〇年頃に新たな軍団を上エジプトに送り込むことによって、ようやくテーベの奪還に成功する。今やテーベ管区はプトレマイオス朝の統治するところとなり、下エジプトと上エジプトとの物流も旧に復した。カオンノフリスは南に退いて、ヌビアからの援軍とともにプトレマイオス朝の軍に対する抗戦を続けたが、ついに前一八六年八月二八日、おそらくアスワンの近くで行われた戦闘において、「王の第一の友人」コマノスが率いるプトレマイオス朝軍に決定的な敗北を喫する。プトレマイオス朝軍の勝利の報

<sup>19</sup> Clarysse and van der Veken (1983) 40-41.

<sup>20</sup> Pestman (1995) 105. ただし、ヴェイスは、プトレマイスはエレファンティネ同様、一貫してプトレマイオス朝のもとにあったと見る。Veisse (2004) 25.

<sup>21</sup> フィロクレスは、おそらくアビュドスを占拠していた反乱軍に対する包囲軍に加わっていたのであろう。Veisse (2004) 17.

<sup>22</sup> Clarysse and van der Veken (1983) 40-41.

<sup>23</sup> Veisse (2004) 19.

は、同年九月六日にアレクサンドリアの宮廷に報告され、「神々の敵」カオンノフリスは捕虜としてアレクサンドリアに連行された後、処刑された。

以上が、南部大反乱の展開の概略であるが、この間、プトレマイオス朝の膝元であるデルタでも反乱が勃発していた。ポリュビオスは、『歴史』第二二巻で以下のように述べている。

「プトレマイオス王（五世）が、リュコポリスを攻囲したとき、恐れをなしたその地のエジプト人の領袖たちは、王の信義に身を委ねた。しかし、王はこの者たちに残虐な仕打ちを加え、結局それがその後の数々の危機を招き寄せてしまったのである。ポリュクラテスが叛徒たちを鎮圧したときも、王の振る舞いは同様だった。そのとき、領袖たちのうちでも、アティニス、パウシラス、ケスフォス、イロバストスはなお生きながらえていたのだが、抵抗を諦めてサイスに出向き、そこで王の信義に身を委ねた。ところが、プトレマイオスは信義を破り、この者たちを裸にして戦車に縛り付け、引きずった後で、拷問を加えて殺したのである……」<sup>24</sup>。

この記述のうち、ブシリス州の反乱鎮圧をめぐる経緯は、ロゼッタ・ストーンに詳述されており、そこからプトレマイオス五世によるリュコポリス攻城戦については、前一九七年のナイルの増水期に行われたことが判明している。碑文中で、王権に対する敵対行為が父王、すなわちプトレマイオス四世の時代から生じていたと述べられていることから、具体的な相互の関係は不明ながら、デルタの反乱が南部大反乱と並行して進んでいたことは間違いなさであろう。なお、上記の引用部分の後段からは、上エジプトの反乱鎮圧後も、デルタではなお散発的に反乱が繰り返されていた状況が窺われる。

#### 4. 南部大反乱とプトレマイオス朝の対外政策

前三世紀末から前二世紀初頭にかけてナイル世界を揺るがせたエジプト人の反乱をめぐる最大の謎は、なぜプトレマイオス朝が反乱の鎮圧に二〇年もの年月を要したのか、あるいは終着点から遡って見るならば、長期にわたる深刻な国内の混乱にもかかわらず、なぜプトレマイオス朝が最終的にこの危機を克服することができたのか、という点に集約される。そこで、この時期のアレクサンドリアの宮廷の動向、とりわけ対外政策についてここでもう一度その要点を振り返っておこう。

上述したように、上エジプトで反乱軍の指導者ハロンノフリスがファラオとして即位したのは前二〇五年の秋のことだったが、それから一年もたたない前二〇四年の夏、プトレマイオス

<sup>24</sup> Polyb. 22.17.1-5.

四世が亡くなった。当時、宮廷で実権を握っていた廷臣ソシビオスとアガトクレスは、四世の死を伏しておき、四世の妹であり妻であったアルシノエ三世を暗殺した上で、前二〇三年夏、軍の指揮官たちの前で王夫妻の崩御を告知するとともに、当時六歳の遺児（プトレマイオス五世）を玉座につけた<sup>25</sup>。

プトレマイオス四世のもとで活躍したソシビオスは、この後まもなく亡くなったようであるが、アガトクレスは幼いプトレマイオス五世の摂政として、ただちに活発な外交政策を展開する<sup>26</sup>。彼はまず、ペロプスの子ペロプスをアンティオコス三世のもとへ派遣し、ラフィアの戦いの後にプトレマイオス朝とセレウコス朝のもとで結ばれた条約の遵守を要求した。同時に彼は、ソシビオスの息子プトレマイオスをフィリポス五世のもとへ遣わし、政略結婚を申し入れるとともに、アンティオコス三世が条約を破棄した場合には救援してくれるよう要請した。さらにアガトクレスは、歴史家としても知られるメガロポリス人アゲサルコスの子プトレマイオスをローマ元老院への使節として送り出した。ポリュビオスは、これらの各方面への外交使節の派遣について、アガトクレスの真の狙いは宮廷内の有力者を遠方に排除することにあったと述べているが<sup>27</sup>、必ずしも彼の評価を文字通りに認める必要はないであろう。明らかに、アレクサンドリアの宮廷は、幼いプトレマイオス五世の王位継承が招くと予想された国際的な危機の芽を、外交的に摘んでおこうとしていたのである。

しかし、この試みが逆効果となったことは、上述したアンティオコス三世とフィリポス五世との間で結ばれたプトレマイオス朝の領土分割協定が示す通りである。前二〇三年末に、アガトクレスはアレクサンドリアにおけるマケドニア兵のクーデタによって惨殺され、翌年にはアンティオコス三世が軍を率いてコイレ・シリアに侵攻した。いわゆる第五次シリア戦争の開始である。しかし、プトレマイオス朝の側も、アンティオコス三世がパレスティナを勢力下に収めようとするのを座視していたわけではなかった。というのも、アガトクレスによって傭兵募集のためにギリシアに派遣されていたアイトリア人のスコパスが、雇い入れた新たな兵力を率いて反撃に出たからである。しかし、スコパスは前二〇〇年にパニオンでセレウコス朝の軍と戦って敗れ、シドンに立て籠もって抵抗したものの、前一九九年の夏には降伏を余儀なくされた<sup>28</sup>。

プトレマイオス朝にとって幸いだったのは、この間、ロドスとペルガモンによるローマ元老院への直訴を契機として第二次マケドニア戦争が始まり、もう一人の敵であるフィリポス五世の直接の関心（さらに、間接的にはアンティオコス三世の関心）がエジプトから逸らされたこ

25 Polyb. 15.25.3f. プトレマイオス五世の即位年代をめぐる議論については、Walbank (1985) 2038-56 (=JEA 22 (1936) 20-34) を参照。ユスティヌスは、プトレマイオス四世が遺言でローマに遺児（後の五世）を託したとするが、その信憑性は疑われている。Gruen (1984) 680-681.

26 Polyb. 15.25.13-14.

27 Polyb. 15.25.15.

28 Polyb. 16.19. Hölbl (2001) 139; Huß (2001) 490-491.

とであろう。開戦の直前、前二〇〇年にアビュドスを攻囲中のフィリポス五世のもとを訪れたローマからの使節は、彼にプトレマイオス朝の領土を蚕食しないよう警告した<sup>29</sup>。また、前一九八年秋に行われたニカイアの会談でも、ローマ軍を率いるティトゥス・クインクティウス・フラミニヌスは、フィリポス五世に対して、プトレマイオス四世の死後にプトレマイオス朝から奪った領土をエジプトに返還するよう要求している<sup>30</sup>。前一九七年初夏のキュノスケファライの戦いにおけるフィリポス五世の敗北は、明らかにプトレマイオス朝にとっては朗報だった。

この前一九七年には、アレクサンドリアの宮廷でも様々な動きがあった。まず、この年の夏から秋にかけて、傭兵軍司令官としてプトレマイオス朝に尽くしてきたスコパスが謀反の嫌疑をかけられて失脚し、宮廷からアイトリア人勢力が一掃された。スコパスに代わって実権を握ったアカルナニア人のアリストメネスは、アルゴス人のポリュクラテスがキュプロスからもたらした潤沢な資金を用いて、十一月二六日に盛大にプトレマイオス五世の<sup>アノクレテリア</sup>宣布式を挙行了した<sup>31</sup>。それを受けて、翌年（前一九六年）の三月二七日には、エジプト人の神官団がメンフィス決議（ロゼッタ・ストーン）を採択した。

この頃、第二次マケドニア戦争でフィリポス五世を降したローマの関心は、当然のことながらセレウコス朝に向かっていた。折しも、アンティオコス三世は軍を率いてトラキアに進出していたが、リュシマケイアで行われたローマ側の使節との会談の席で、プトレマイオス朝から奪い取った領土を返還するようローマ側に求められたアンティオコス三世は、いささか唐突に、政略結婚によって自らプトレマイオス朝と講和を結ぶつもりであると宣言した<sup>32</sup>。この件が、あらかじめプトレマイオス朝と事前に協議されていたかどうかは不明であるが、実際に、前一九五年には両者の間で講和が結ばれ、翌年の冬には、アンティオコス三世の娘クレオパトラとプトレマイオス五世との結婚式が、他ならぬラフィアで催されている。なお、リュシマケイアの会談が行われているさなかに、プトレマイオス五世が急死したとの噂が伝わり、アンティオコス三世はこの機に乗じてキュプロス島を占領しようと試みたが、嵐のために果たせなかった<sup>33</sup>。

その後のローマとアンティオコス三世との間の戦争（前一九二年～前一一八年）に際しては、プトレマイオス朝は完全に蚊帳の外に置かれることを余儀なくされ、アパメイアの和においても、プトレマイオス朝の権益は何ら顧みられることがなかった<sup>34</sup>。しかし、プトレマイオ

<sup>29</sup> Polyb. 16.34.3.

<sup>30</sup> Polyb. 18.1.14; Liv. 22.33.4.

<sup>31</sup> Polyb. 18.55.3-6.

<sup>32</sup> Polyb. 18.50-51, Liv. 33.40.3.

<sup>33</sup> Liv. 33.4.1.

<sup>34</sup> Huß (2001) 515. アパメイアの和では、フリュギアなどはベルガモン王国の支配下におかれ、リュキアやカリアはロドスの領土となった。Polyb. 21.43.

ス朝が依然として地中海の国際情勢に関心を抱き続けていたことは、前一八八／七年に中部ギリシアの国際聖域デルフィに向けてエジプトから使節団が派遣されている事実からも確かである<sup>35</sup>。この使節団のメンバーには、翌年の南部大反乱の鎮圧に際して軍の指揮をとったプトレマイオスの子コマノスが、その兄弟とともに加わっていた<sup>36</sup>。その翌年、前一八七／六年には、プトレマイオス五世はアテネ人デメトリオスをアカイア連邦の<sup>シュノドス</sup>定例議会に派遣して同盟の更新を申し入れているが<sup>37</sup>、このことも、ギリシア世界に対するプトレマイオス朝の関心の高さをよく表している。これを受けて、アカイア連邦からは、同盟更新を誓約するために、ポリュビオスの父親であるリュコルタスらがアレクサンドリアに派遣されたが、彼らは前一八五年に、プトレマイオス五世からの贈与品として、軽騎兵用の青銅製武具一式を六千着、それに青銅貨二百タラントンを受け取って帰国している<sup>38</sup>。

## 5. 南部大反乱の展開と地中海世界の動向

これまでの検討を踏まえるならば、南部大反乱の時代のエジプトの国内情勢と同時代の地中海世界の国際情勢それぞれの推移の間には、果たしてどのような影響関係があったと考えるべきであろうか。

まずは、エジプトの南部大反乱が当時の国際情勢に何らかの影響を及ぼすような事態があったか否かを検討しよう。上述したように、上エジプトにおける反乱が始まったのは前二〇七／六年、ハロンノフリスがエジプト人のファラオに推戴されたのは前二〇五年のことだったが、これらの事件がただちに地中海世界に何らかの影響を与えたことを示唆する証拠はない。アンティオコス三世とフィリポス五世がプトレマイオス朝の領土分割協定を結んだのは、ようやく前二〇三年になってからのことであり、その契機は明らかにこの年に明らかにされたプトレマイオス四世の死とまだ幼い五世による王位の継承だった。また、エジプトの反乱軍は前二〇〇年頃までは順調に勢力を拡大していた様子であるが、それにもかかわらず、前二〇二年にセレウコス朝との間に第五次シリア戦争の火蓋が切られると、アレクサンドリアの宮廷は、躊躇することなくスコパスの率いる傭兵軍をシリア戦線に投入している。その後についても、エジプト国内の事件が地中海の国際情勢に作用したのは、前一九六年のリュシマケイアの会談中にプトレマイオス五世の死の報がもたらされたときのことくらいであろう。この虚報が根も葉もないものではなく、リュコポリスの叛徒の領袖に残酷な仕打ちを加えたことによってプトレマイ

<sup>35</sup> Syll.<sup>3</sup> II, 585.

<sup>36</sup> Mooren (1975) 82-85.

<sup>37</sup> Polyb. 22.3.5-9. プトレマイオス朝とアカイア連邦との間にはそれまでに複数の条約が結ばれていたらしく、このとき更新されたのが具体的にどの条約であったのかが、後に連邦会議における紛糾の原因となった。Polyb. 22.9.5-12.

<sup>38</sup> Polyb. 22.9.3.

オス五世に降りかかったとポリュビオスが述べる「数々の危機」に対応しているとするフースの指摘は<sup>39</sup>、おそらく正鵠を射ている。しかし、この事件を別とすれば、南部大反乱の期間を通じて、エジプト国内の争乱が直接的に地中海の国際関係の動向に関与した痕跡はきわめて乏しい。

それでは、逆のケース、すなわち地中海世界の動向が南部大反乱の帰趨に影響を与えた可能性についてはどうであろうか。前二〇〇年代の末に向けて反乱軍が勢力を拡大することができた一因は、アレクサンドリアの宮廷内での混乱に加えて、明らかにフィリポス五世のエーゲ海への進出と第五次シリア戦争の開始によって王権側の関心が地中海・シリア方面に引き付けられていたことにあった。そうであれば、前二〇〇年頃の王権側の一時的な巻き返しも、ローマの介入が地中海世界におけるプトレマイオス朝の立場を相対的に有利なものとしたことと無関係ではなかったのかもしれない。

しかし、地中海世界の動向と南部大反乱の帰趨とがもっとも接近したのは、前一九七年のことだったと考えられる。この年の初夏にローマがキュノスケファライの戦いでフィリポス五世を破ったことは、ギリシア人傭兵の交流を通じて、たちまちナイル世界にも知れ渡ったはずである。アレクサンドリアの宮廷が主導したデルタにおける反乱勢力の鎮圧、プトレマイオス五世の宣布式の成功、そして何よりも翌年に行われたメンフィス決議による王権とエジプト人神官団との間の一定の合意の形成は、おそらく第二次マケドニア戦争の終結に伴う外交的な追い風なくしては実現しなかった。とりわけ、この期に及んでエジプト人神官団がプトレマイオス朝を支持する姿勢を明らかにしたことの背景には、王権の存立に関わる外交的な危機が去ったとする判断があったと考えて良いであろう。さらにこの直後、プトレマイオス朝は政略結婚によってセレウコス朝と講和を結び、これによって再び勢力を拡大しつつあった南部大反乱への対応に全力を傾けることが可能になった。確かに、ローマ側はプトレマイオス朝との関係強化にはきわめて慎重であり、前一八八年のアパメイアの和は領土的な面では決してプトレマイオス朝にとって有利な内容とはならなかったが、望むと望まないにかかわらず、この間に地中海の国際情勢と距離を置いたことが、おそらく前一八〇年代の初めから王権が南部大反乱の鎮圧に全力を傾注することができるようになった原因だったと考えられるのである。

## おわりに

これまで、前三世紀末から前二世紀初頭にかけて続いた南部エジプト大反乱は、プトレマイオス朝の王権の衰退を象徴するドメスティックな出来事として、すなわち本質的には地中海の国際政治のメインストリームの外で展開した周縁的な事件として捉えられがちだった。そのよ

---

<sup>39</sup> HuB (2001) 500, n. 54.

うな理解が、この時代の中心的な史料であるポリュビオスの歴史観に由来していることは言うまでもない。しかし、本論文における検討作業は、南部大反乱の展開が同時代の地中海世界の情勢と密接に連動していたこと、そしてこの関係を把握することが南部大反乱の性格を理解するにあたって不可欠であることを示している。

南部大反乱の勃発の背景に、王権に対する一部の上エジプトの在地民の経済的な苦境に根ざした反発があったであろうことはもちろんである。しかし、それに対する王権の対応は、必ずしもこの反乱の鎮圧を至上命題とするものではなかったように見える。リュコポリスを中心とするデルタの反乱に対する対応が峻烈を極めたのとは対照的に、二〇年にわたって続いた反乱の期間中に王権が本格的に兵力を上エジプトに動員したのは、ローマの東方への介入がプトレマイオス朝の直面していた危機を緩和する展望のあった前二〇〇年頃の一時期を除くと、第五次シリア戦争が終結し、さらにテルモピュレの戦いとマグネシアの戦いによってアンティオコス三世の敗色が濃くなっていった前一九一年以降に限定されている。この最終段階に至るまで、明らかに王権は南部大反乱の鎮圧にさほど積極的ではなかった。それは、なぜだったのか。

ここで考慮しなくてはならないのが、上エジプトの在地エリート、具体的にはテーベのアメン神官団の動向である。反乱軍が推挙したハロンノフリスとカオンノフリスが、ともにテーベのアメン神官団によってファラオと認められていることは、しばしばこの反乱の黒幕がテーベのアメン神官団だったのではないかという憶測を呼んできた。すなわち、プトレマイオス朝を支持するメンフィスのプタハ神官団と、これに反発するテーベのアメン神官団とのイデオロギー的な対立がこの反乱の背景にあったのではないか、というのである<sup>40</sup>。しかし、上エジプトの反乱軍とテーベのアメン神官団との関係は、それほど単純に説明できるものではない。というのも、これらのエジプト人ファラオがアメン神官団からファラオとしての王名を与えられたことは確かだとしても、テーベでは彼らを讃えるレリーフなどのモニュメントがまったく知られていないからである。何よりも、反乱鎮圧後のプトレマイオス朝が、テーベのアメン神官団に対して何ら報復措置をとっていないことも、少なくとも王権の公式見解に従えば、反乱軍と神官団との間には一定の距離があったことを示唆している<sup>41</sup>。おそらく、神官団には、一世紀以上にわたって上下エジプトの統一的な支配に基づく秩序（マート）を堅持してきたプトレマイオス朝の王権を見捨て、どこまで支配圏を確立することができるか定かではない反乱軍に公然と与することは、あまりにも危険な賭として映ったのであろう。あるいは、王権側にとっては、北の地中海世界の流動的な状況に集中的に対応するためにも、上エジプトについてはテーベのアメン神官団と反乱軍それぞれの勢力が相互に牽制し合う状況が続いた方が望ましかったという事情があったのかもしれない。いずれにしても、前一八六年に南部大反乱を鎮圧したプトレマイオス朝軍が、その前年にギリシア世界への外交使節として活躍したコマノスに

<sup>40</sup> Hölbl (2001) 155.

<sup>41</sup> Vantorpe (1995) 323-233.

率いられていたことは、この反乱の性格を考えるにあたって、いかにも示唆的である。

最後に、プトレマイオス朝に対するローマの対応についても、一言しておくべきであろう。前二〇〇年以降に東方世界に進出してきたローマは、他のヘレニズム諸王国に対するのとは異なり、プトレマイオス朝にはかなり中立的な対応をとっており、それが結果としてエジプトにおける南部大反乱の鎮圧に寄与したであろうことは、上述した通りである。それでは、このようなローマの姿勢は、いったい何に由来していたのだろうか。ポリュビオスは、南部大反乱の勃発に先立つ前二一一／〇年に、ローマが極度の穀物不足に苦しんでいたことを伝えている<sup>42</sup>。その理由は、カルタゴ軍の遠征によってイタリアの農地が破壊されたことだったが、このときローマが行ったのは、プトレマイオス四世に使節を派遣することだった。その目的が、エジプトからの穀物の輸入にあったことは明らかである。この逸話は、戦時における穀物の安定的な確保が、いかに当時の国際関係にとって重要であったかを示唆していると同時に、プトレマイオス朝の「延命」もまた、ロドスなどによって仲介された東地中海の海上交易ネットワークによるところが大きかった事実を伝えているといえよう。

キーワード：プトレマイオス朝、反乱、ヘレニズム、地中海

## 文献表

- Austin, M. M. (2006) *The Hellenistic World: From Alexander to the Roman Conquest, A Selection of Ancient Sources in Translation*, Second Augmented Edition, Cambridge.
- Buraselis, K., M. Stefanou and D. J. Thompson (eds.) (2013) *The Ptolemies, the Sea, and the Nile: Studies in Waterborne Power*, Cambridge.
- Clarysse, W. (2004) The Great Revolt of the Egyptians (205–186 BC), <http://tebtunis.berkeley.edu/lecture/revolt>
- Clarysse, W. and G. van der Veken (1983) *The Eponymous Priests of Ptolemaic Egypt (P.L. Bat. 24)*, Leiden.
- Eckstein, A. M. (2008) *Rome Enters the Greek East: From Anarchy to Hierarchy in the Hellenistic Mediterranean, 230–170 BC*, Oxford.
- Gruen, E. S. (1984) *The Hellenistic World and the Coming of Rome*, Berkeley.
- Hölbl, G. (2001) *A History of the Ptolemaic Empire*, London.
- Huß, W. (2001) *Ägypten in hellenistischer Zeit 332–30 v. Chr.*, München.
- Kurth, D. (2004) *The Temple of Edfu: A Guide by an Egyptian Priest*, Cairo.
- Ma, J. (1999) *Antiochos III and the Cities of Western Asia Minor*, Oxford.
- Mooren, L. (1975) *The Aulic Titulature in Ptolemaic Egypt: Introduction and Prosopography*, Brussel.
- Pestman, P. W. (1977) *Recueil de textes démotiques et bilingues*, Leiden.
- (1995) Haronnophris and Chaonnophris: Two Indigenous Pharaohs in Ptolemaic Egypt (205–186 B.C.), in S. P. Vleeming (ed.) *Hundred Gated Thebes (P.L. Bat. 27)*, Leiden, 101–137.
- Shipley, G. (2000) *The Greek World after Alexander 323–30 BC*, London.

<sup>42</sup> Polyb. 9.11a.1–3.

- Suto, Y. (2003) Text and Local Politics in the chora of Ptolemaic Egypt: The Case of OGIS 94, *Journal of Studies for the Integrated Text Science*, 1-1, 1-12.
- Vandorpe, K. (1995) City of Many a Gate, Harbour for Many a Rebel: Historical and Topographical Outline of Greco-Roman Thebes, in S.P. Vleeming (ed.) *Hundred Gated Thebes (P.L. Bat. 27)*, Leiden, 203-239.
- Veisse, A.-E. (2004) *Les "Révoltes égyptiennes" : recherches sur les troubles intérieurs en Égypte du règne de Ptolémée III à la conquête romaine*, *Studia Hellenistica* 41, 2004.
- Walbank, F. W. (1985) The Accession of Ptolemy Epiphanes: A Problem in Chronology, in F. W. Walbank, *Selected Papers: Studies in Greek and Roman History and Historiography*, Cambridge, 38-56.

**Abstract**

## The Great Uprising of Upper Egypt in the Mediterranean Context

Yoshiyuki Suto

This paper aims at elucidating the historical settings of the great uprising of the native Egyptians against the Ptolemies, lasting from 206 BC to 186 BC, in the wider Mediterranean context. This internal affair has traditionally been interpreted as a symptom of general decline of the Ptolemaic rule, though close observations of the course of the revolts strongly suggest that both foreign and domestic policies of the Ptolemaic court as well as that of the influential political body of Egyptian priests toward the rebels had recognizable relations to the political situations outside Egypt, the advance of the Romans into the East Mediterranean in particular. The mutual agreement between Ptolemy V and the Egyptian priests (Memphis decree) was announced just after the battle of Cynoscephalae and the Ptolemies mounted a serious counteroffensive against the rebels only after the treaty of Apamea, which removed the direct threat from the Seleucids. The fact that diplomatic activities of Kommanos preceded his final suppression of the rebellion in 186 also corroborates the view that the foreign and domestic affairs of this period were closely interrelated under the Ptolemaic rule.

Keywords: Ptolemies, revolt, Hellenism, Mediterranean